

2024 年度水産海洋学会 活性化委員会ナイトセッション

主催：水産海洋学会 活性化委員会

場所：静岡県総合研修所 もくせい会館「静岡県職員会館」 富士ホール

形式：自由参加（シンポジウムの延長）

日時：2024 年 11 月 22 日 18:00 – 19:30

テーマ：現場とどう付き合って研究を進めていくか

タイトル：現場のつぶやき

開催趣旨：

水産海洋学の前身である水産海洋研究会創設時の目標は、「水産学・海洋学の研究者と漁業者との対話に重点を置きながら、生物資源と環境の相互作用を明らかにし、水産業の発展に寄与する」ことにあり、水産海洋学は現場と密着しながら発展してきた分野でもある。

漁業者との対話を通じての「研究の種の発掘」は多くの研究者が経験するものであり、水産海洋学の真髄でもある。一方で、こうした対話は、その立場や見方によって異なる意見を取りまとめる必要があることから、現場に出る研究者の経験によるところも大きく、学生をはじめとする若手研究者は苦勞することが多いはずである。

そこで、今回のナイトセッションでは、現場を含む様々な経験をもつ研究者に、取り組んできた調査研究やモニタリングを進める上で苦勞したことや、進め方のノウハウを参加者と共有して頂く。各組織で困っていることや悩み、そして解決策の案を共有すると共に、組織をまたいだ相談相手を探す情報交換の場とすることで、今後の水産海洋学研究の活性化につなげたい。

プログラム

1. 趣旨説明
2. 話題提供
3. パネルディスカッション
4. 閉会挨拶

話題提供者

福井県水産試験場 前川 龍之介 さん

タイトル：海と人をつなぐ“現場”-漁業者と挑む資源研究-

概要： 福井県水産試験場は資源管理を目的に漁船活用型調査に取り組んでおり、底曳網漁業者に1網ごとの操業日誌の記帳を依頼している。既に20年以上のデータを蓄積しており、この長期データの希少性は国内トップ水準にある。今回の発表では研

究職 4 年目の若手研究員が考える漁業者との二人三脚で調査を継続するための試行錯誤について紹介する。

水産研究教育機構 富士 泰期 さん

タイトル： 漁業者との対話に関するある研究者の悩み

概要： 私は地方公務員として 2 年勤務した後、水産研究・教育機構で研究職として働いています。地方公務員をしていたころに比べて、今の仕事では漁業の現場で「対話」をする機会は減ってしまいました。対話に根差した有益な研究をするためにどうすればよいのか、私の個人的な悩みを共有しますのでぜひアドバイスをお願いします。

神奈川県水産技術センター 岡部 久さん

タイトル： 神奈川県の漁業調査指導船によるモニタリング調査

概要： 地方水試による代表的な海洋環境の把握方法には、調査船を使った海洋観測と卵稚仔調査などの生物モニタリングがある。今回は神奈川県が東京湾で実施し続ける 2 つの生物モニタリングを紹介し、「いつまでやるの」と聞かれば「東京湾漁業がある限り」と応えられると確信する理由についてお話しする。